

横浜の下水道管きょの歴史と更新事業



1. 横浜の下水管きょ構築の歴史

横浜の近代下水道は、イギリス人Richard Henry Bruntonが慶応4年（1863年）幕府の要請により、灯台の建設技師として横浜に到着したときに始まる。

ブルントンが来日した時は、既に幕府が倒れた後であったが、新政府の灯台局に雇われ、灯台建設のほか横浜居留地の整備事業を数多く手がけている。着任早々、居留地の測量に着手し、明治2年（1869年）から3年間には、旧居留地の道路工事や下水道工事を計画し、道路を碎石舗装し側溝を整備するとともに、陶管を布設する下水道工事を設計している。また、明治4年、新埋立地の排水、道路整備工事を設計し陶管を布設している。

ブルントンはこれらの整備計画の中で、関内居留地を旧横浜村（旧居留地）、文久年間以降に埋め立てられた地区（埋め立て居留地）、明治4年以降ブルントンの設計・監督により埋め立てられた地区（後に新埋立地と呼ばれ、前記の埋め立て居留地は旧埋立地と改称されている。）の3地区に分け、その地勢に応じた排水工事計画を示している。

ブルントンが政府から託された灯台の仕事が一段落すると、経費節約のため明治9年（1876年）に解雇された。しかし、「灯台の父」としてだけでは無く、横浜の近代的都市計画の先駆者として、わが国初の近代的下水道を導入するとともに、設計・監督に大きな業績を残した。

その後、外国人の増加に伴い明治14～16年、17～20年の二期にわたり、関内居留地全域の下水道改

築工事が行われている。幹線には長径4尺5寸（約1,363mm）～短径3尺（約909mm）等の煉瓦造りの卵形管を使用して、枝線は陶管を用いて総延長16.6kmを布設している。この当時の設計者は、当時の県土木課御用掛の三田善太郎で、彼は日本人として、最初の近代的下水道の設計者としてこの工事にあった。この煉瓦管の一部は、現在もなお中華街南門付近で使われている。これらの整備により、延長は約88.2kmとなった。

明治22年（1889年）横浜に市制が施行され、明治32年（1899年）に条約改正により、居留地が廃止返還されたことにより、下水道の施設は、神奈川県より横浜市に移管された。この結果、暫時居留地以外の地域においても下水道整備が進められ、関東大震災前までに整備された管きょは、約235.7kmとなっている。

なお、明治40年（1907年）には、大蔵省が横浜の新港埠頭の建設で、初めて鉄筋コンクリート管を使用している。

その後、大正8年（1919年）都市計画法制定に伴い下水道事業が都市計画事業に加えられたことにより、下水道整備の基本調査に着手したが、同年9月1日の関東大震災により中止となり、この震災により、これまでに布設された管きょのほとんどが破壊された。

大正13年（1924年）7月に、これらの復興事業として土地区画整理事業が発足し、また、昭和6年3月下水道震災復旧事業が完了している。また、同年「下水道調査基本設計説明書」をまとめ、引き続き、昭和12年「横浜都市計画下水道調査報告」が完成している。この報告では、市域を3処理区に分け、各処理区